

平城京東市の造営と東堀河の掘削

池田 裕英

はじめに

平城京における東西の市の所在については、東市が左京八条三坊五・六・十一・十二坪に、西市が右京八条二坊の同坪に推定されている。東市が三坊、西市が二坊と左右対称でないのは、西市側の右京三坊以西が丘陵地帯にかかってしまうことや、平城京の西堀河である秋篠川にも近いことがその理由としてあげられ、右京八条二坊には「市田」の字名も残る⁽¹⁾。東市が左京八条三坊に位置することについては、早稲田大学図書館蔵の東大寺薬師院文書の東大寺領東市庄と相模国が平城京内に所有していた調邸とに関わる史料からうかがうことができる⁽²⁾。

市と堀河とは物資の運搬に関わり不可分の関係にあり、京の営みにとっても重要な役割を果たした。現在の秋篠川が西堀河にあたることは、『今昔物語』の第12巻第20話に堀河が薬師寺の東の大門の前を流れていたとみえることから明らかである。東堀河は、現在は地割痕跡としてしか地上に残っていないが、発掘調査により左京三坊を三条から九条まで南北に貫流し、京外に続いていたことがわかっている。この東堀河と東市跡推定地についてはこれまでに発掘調査が積み重ねられ、徐々にではあるがその様相が明らかとなってきた。以下ではその成果から考えられる東市の造営と東堀河の掘削について述べる。

1. 東堀河の掘削

平城京の東堀河は、左京三坊の九～十二坪のほぼ中央を南北に貫くように流れていた。1975年の左京八条三坊九坪での発掘調査（図1-7）で初めて検出され⁽³⁾、2016年現在まで12地点で確認されている。従前は左京四条を西に流れる菩提川と左京五条で接続すると考えられてきた。しかし、1994年に奈良市教育委員会が左京四条三坊十坪で行った発掘調査でも検出されたことから（図1-3・図3）、これまでの推定よりも北に続くことがわかった⁽⁴⁾。その後、さらに北の左京三条三坊十一坪でも確認され（図1-1・図6）、左京二条を西流したとされている旧佐保川に端を発する可能性が高くなった⁽⁵⁾。



図1 東堀河検出地点及び関連遺構の調査位置

(1) 東堀河の規模

東堀河の幅員が完全に検出されている例はそれほど多くないが、当初は10～12mであったようである（表1）。左京八条三坊九坪で明らかにされたように、後に5～10mに狭められたところもあるが、すべての調査地で掘り直しや改修の痕跡がみついているわけではない。狭められた時期は、左京三条三坊十一坪では9世紀後半、左京八条三坊九坪では9世紀前半以前であることがわかっている。いずれも平安時代に入ってからのものであり、平城京期、東堀河が機能していた時期には当初の幅を維持していたのかもしれない。

検出面からの深さは0.7～2.2mで、河底の標高は北から南に向かって下る。勾配は概ね2‰程度であるが、九条条間路付近から京外の間では1.2‰程度と若干緩やかである。

左京四条三坊九坪（図1-2・図2）⁽⁶⁾、同十坪、左京三条三坊十一坪では堀河の最下層・下層の埋土は粗砂や砂礫層で、水流の激しい時期があったようである。これらの地点は佐保川が近いことによる影響も考えられるが、八条・九条での調査でも下層には砂や砂礫が堆積しており、ある程度水流があったことがうかがえる。

(2) 東堀河の両側

東堀河の左右2～6mの範囲には、建物等がない空閑地が存在した。左京四条三坊九坪では東堀河の東側で堀河と建物群との間に南北に並ぶ不整形の落ち込み状遺構と幅約3mの空閑地を検出している。堀河西側では西岸から3mと6mの位置に掘立柱列を検出し、その間が空閑地となっていた。堀河の東西に空閑地があったことがわかる（図2）。同十坪でも東堀河の東で断続的に続く溝状遺構を検出している（図3）。ここでも堀河と溝状遺構との間では遺構はほとんど認められず、空閑地となっていた。このことから溝状遺構は区画のための施設と考えられ、空閑地は宅地からは除外され、道路のように使われていたようである。『延喜式』巻42左京職京程条には「小路十二。各四丈。一路加堀川東西邊各二丈。」とあり、堀河の両岸には幅2丈（約6m）の道が設けられていたことがみえる。上述の遺構がない空閑地はこの道に相当すると考えられる。また、左京四条三坊十坪では堀河東岸で梁間2間（2.7m）、桁行1間（1.8m）以上の栈橋状の遺構を検出している。柱掘方内に

表1 東堀河の幅・深さ・河底の標高

No	調査地	最大幅(m)	深さ(m)	河底標高(m)	次数等
1	L. 3. 3. 11	12.2以上	1.4	60.3～60.5	市 HJ499
2	L. 4. 3. 9	9.5～10.1	0.9～1.12	59.6	榧 004078
3	L. 4. 3. 10	7.5～8.5	1.0～1.1	58.9～59.1	市 HJ314
4	L. 6. 3. 10	7.2以上	0.9	56.5	市 HJ284
5	L. 6. 3. 10	5以上	1.0	56.4～56.8	市 HJ52
6	L. 6. 3. 11	10以上	0.7	55.9	市 HJ141
7	L. 8. 3. 9	約10	1.4	55.1	国 1976
8	L. 8. 3. 11	10以上	1.6	54.6～54.8	市 TI04
9	L. 8. 3. 11	5.0以上	1.9～2.2	54.6～54.9	市 TI34
10	L. 8. 3. 11	3.3以上	1.6以上	底まで達せず	市 TI35
11	L. 9. 3. 10	11以上	約2.0	53.5～53.6	国 1983
12	京外	11.4	2.0	53.1	市 HJ296

市は奈良市教育委員会、榧は奈良県立橿原考古学研究所、国は奈良国立文化財研究所の調査

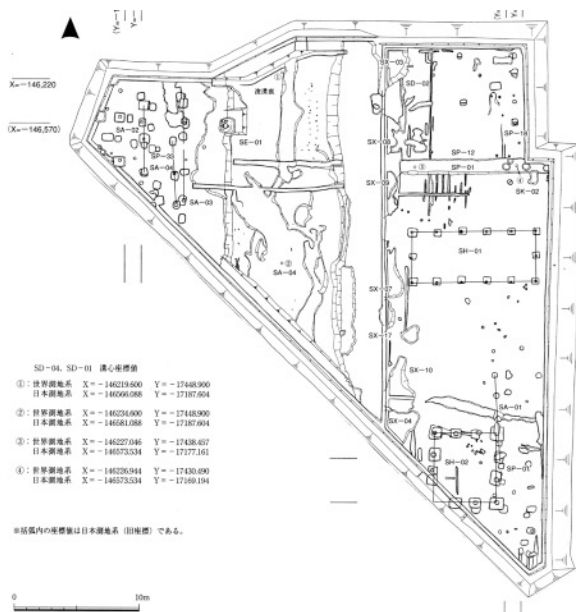


図2 左京四条三坊九坪遺構図(1/600)

注(6)文献より

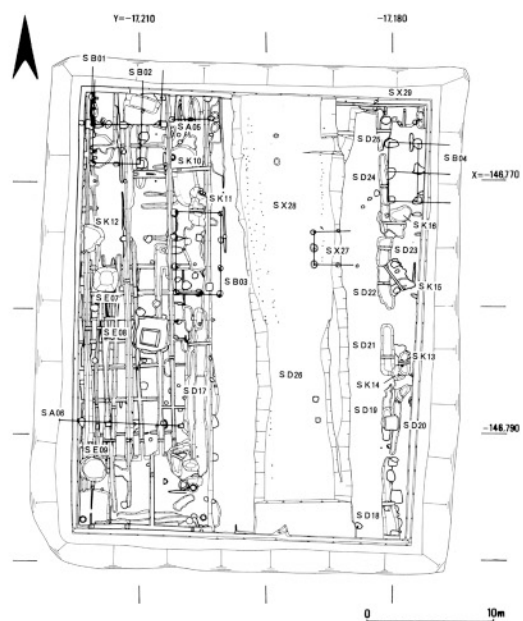


図3-1 左京四条三坊十坪遺構図(1/600)

注(4)文献より

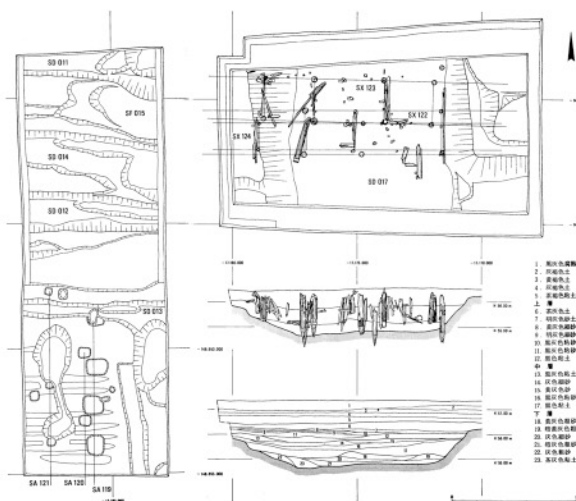


図4 左京八条三坊十一坪遺構図(1/300)

奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査Ⅱ』1984より

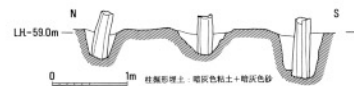


図3-2 左京四条三坊十坪棧橋掘立柱断面図(1/100)

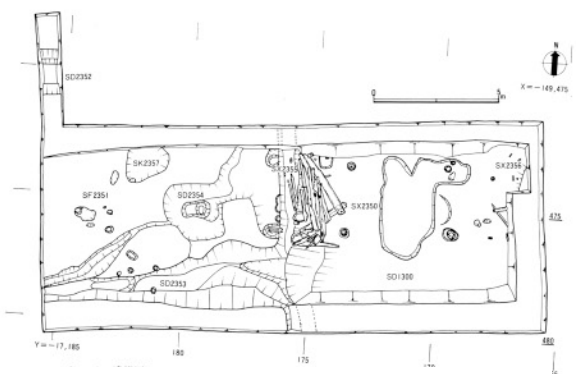


図5 左京九条三坊十坪遺構図(1/300)

注(14)文献より

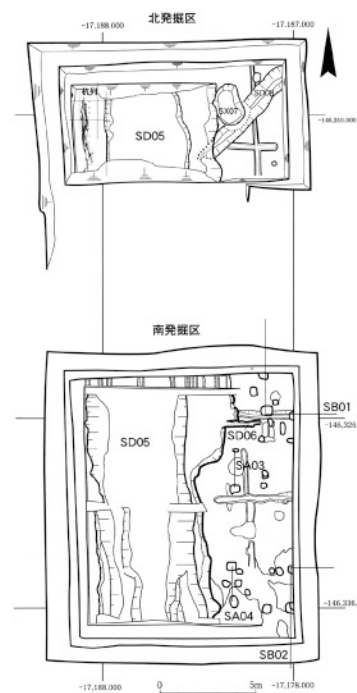


図6 左京三条三坊十一坪遺構図(1/400)

注(5)文献より

は面取りされた多角柱が残存していた。堀河の斜面部でもこの遺構に関わる柱穴を検出しているが、堀河内の柱穴よりも一回り小さく、補助的なものであったようである。検出した位置に道路は交差していないことから、堀河を渡るための橋ではなく栈橋であろうと考えられている。この場所で物資の積み下ろし、運搬を行うために設置されたものとみられる。左京六条三坊十坪の調査（図1-5）でも東堀河の東岸に沿って最大幅6mの空閑地が検出され、空閑地は部分的ではなく東堀河に沿って設けられていたものと考えられる。

(3) 東堀河と左京の排水体系

東堀河から出土した土器は、下層から出土しているのはどの地点においても奈良時代後半から末頃のものが多く、左京三条三坊十一坪では下層に9世紀後半から10世紀初頭の土器が含まれていた。これが掘削の時期を反映したものとは考え難く、現状では出土遺物から東堀河の掘削時期を知ることは難しいといわざるを得ない。これは堀河が浚渫されていたことにもよると考えられ、左京四条三坊九坪の調査では河底で下層堆積以前に行われた浚渫の痕跡とみられる溝状の掘り込みが検出されている。

東堀河は水運による物資の運搬だけでなく、京の排水路としての機能も有した。左京六条三坊十六坪（図1-A）では五条大路南側溝が想定される位置に近接する場所で奈良～室町時代の南北幅6.5m以上の流路を検出している⁽⁷⁾。この遺構が五条大路南側溝にあたるのか否かについては今後の調査成果を待ちたいが、地形からみて西約200mに位置する東堀河に注いだと考えられる。これに関連する遺構として、左京五条五坊五坪（図1-B）では五条大路南側溝が推定される位置で、幅17m以上の東西方向の溝を検出した⁽⁸⁾。この溝は東四坊大路の一坪分東に想定されている京東限の溝渠⁽⁹⁾に接続すると考えられる。左京四条五坊周辺の発掘調査では東四坊大路より東側では奈良時代の建物遺構はほとんど検出されず（図1-C・図7）、東五坊坊間

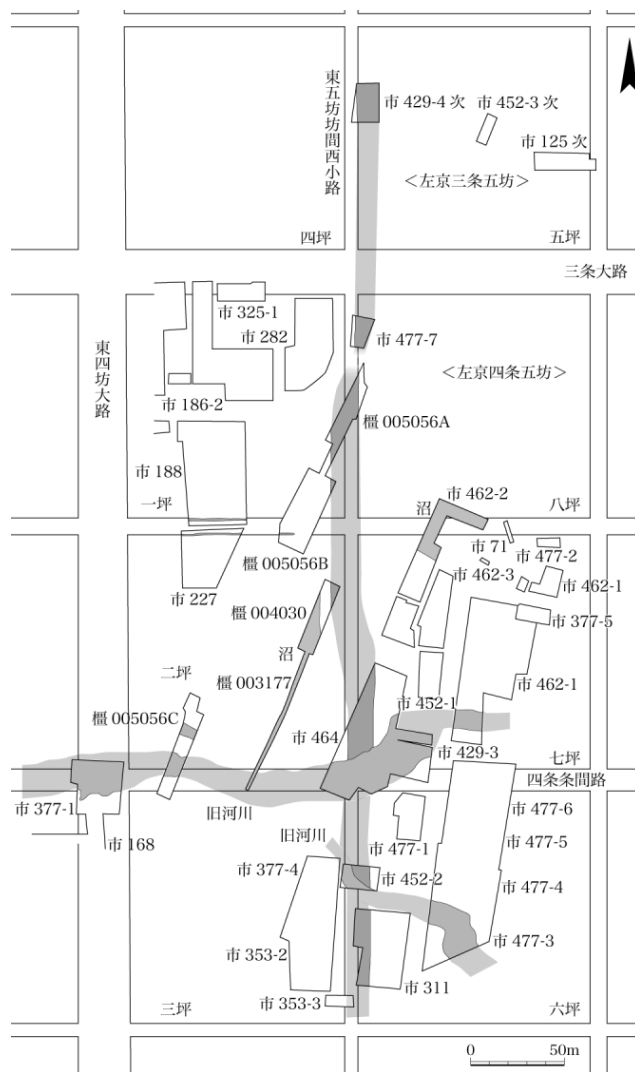


図7 左京三・四坊五坊における条坊と関連遺構(1/4,000)
(市は奈良市教育委員会、榎は奈良県立橿原考古学研究所の調査)

西小路の想定位置で幅3m以上の南北溝を検出した⁽¹⁰⁾。また、四条条間路が想定される位置にも東西方向の河川があったようである。左京三条五坊五坪で行われた調査(市429-4次)では、東側からの氾濫を防ぐためのものと考えられる南北方向の堤防が確認されている。

左京三条、四条の四坊、五坊は東四坊大路を挟んで土地利用の仕方に大きな違いがみられ、東四坊大路より西側の四坊では建物遺構や井戸、土坑などが検出され、宅地として利用されたことがわかるが、東側の五坊では建物遺構はほとんどなく、溝や河川を検出し、宅地として利用された形跡がうかがえない。このような違い、特に東四坊大路より東側での規模の大きな溝等の計画的な施工は重見泰氏が述べているように「複数の流路が東四坊大路よりも西側、すなわち、京城中心部へ無秩序に入り込むことを防ぐための対策」と考えられ、「東四坊大路が奈良時代の平城京の京城に対する認識において、1つの境界となっていた可能性」を示すものであろう⁽¹¹⁾。平城京の東にある春日や高円の花々は佐保川や能登川、岩井川などの水源の地でもあり、京の造営にあたり東側からの水の処理は大きな課題の1つであったと思われる。如上の溝渠の体系的な計画と掘削は、平城京造営の比較的早い段階で行われたであろう。東堀河がその一端を担ったとすれば、出土遺物からではうかがい難い東堀河の掘削時期を考えるにあたり1つの手掛かりとなるように思われる。

2. 東市跡推定地の発掘調査

平城京の東市が左京八条三坊五・六・十一・十二坪に比定される経緯は最初に記したように、早稲田大学図書館蔵の東大寺薬師院文書にみられる東大寺領東市庄と相模国が平城京内に所有していた調邸とに関わる史料に加え、知恩院(京都市)所蔵『写経所紙筆授受

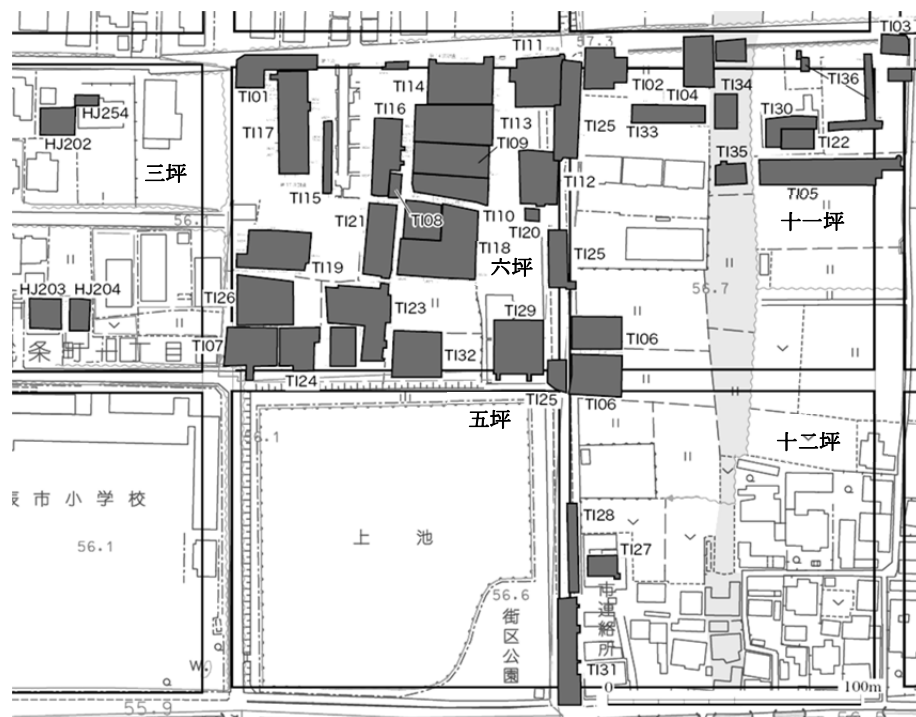


図8 平城京左京八条三坊三・五・六・十一・十二坪発掘調査位置図(1/3,000)

日記』の裏に書かれた「平城京市指図」の存在もあげられる。この左京八条三坊五・六・十一・十二坪では奈良市教育委員会が1982年以来、六坪を中心に発掘調査を行ってきており、2014年までに36次を数える（図8）。これまでのところ、当該地が東市であるという確実な資料は得られてはいないが、坪内の様相の解明が進んできている⁽¹²⁾。

全体に関わることとしては、4つの坪はそれぞれが築地塀で囲まれた独立した区画となっていた。坪の周囲には道路が通り、坪の各辺には門が開いていたようである。上述したように、十一・十二坪には東堀河が流れ、十一坪では東市第4次調査（TI 4次、以下ではTIを略す）で東堀河と堀河に架かる橋を検出した（図4）。この橋は層位から堀河下層埋土堆積中（8世紀後半～末）に構築され、3回にわたって造りかえられていた。ここでは比較的調査が進んでいる六坪、十一坪の遺構について概述する。

(1) 六坪の遺構（図9）

六坪の北西隅では東西2間（柱間1.8m等間）、南北2間（柱間1.5m等間）の総柱建物を検出し、隅櫓のような建物であったとみられる（1次）。東辺のほぼ中央には南北2間（3.0m等間）の門が開いていた（12次）。坪の南端のほぼ中心部では橋脚の可能性のある掘立柱列を検出している（32次）。坪の中心部は遺構密度が低く空閑地であったようで、広場のような使われ方をしていたのではないかとみられる（8・18次）。21次調査では坪の東西・南北それぞれ1/2の位置で坪内を区画する溝を検出し、この空閑地の西限、北限を示す可能性が考えられる。東側でも溝が確認されており、これらの溝によって区画されていたとすると空閑地の広さは700㎡程度となる。そして、空閑地の北側には総柱建物が並ぶ。北東側には南廂が付く建物や桁行4間以上の比較的規模の大きな建物があり、空間の使い分けがされていたようである（9・11・13・14次）。西辺中央で行った19次調査では、建物に先行する坪内を区画する溝やそれを踏襲する塀を検出している。また、この調査では土器埋納遺構が4基みつかったことも興味深い。

六坪で検出した遺構の詳細な時期変遷については今後の課題であるが、奈良時代で3時期程度の遺構変遷があり、東堀河から出土した遺物からもうかがえるように、10世紀前半頃までの遺構が検出されている。

(2) 十一坪の遺構

北東隅の調査では八条条間路に向かい築地に取り付く門を検出し、その前面には1間四方の橋脚の痕跡があった（2次）。30次調査では路面幅1.8mの東西方向の坪内道路と南北両側溝を検出した。側溝は西にいくにつれて深くなり、東堀河に排水したと考えられる。いずれの溝からも8世紀後半から9世紀初めの土器が出土した。坪西辺でも、東三坊坊間路に開く門の可能性のある南北2間の掘立柱列を2箇所検出している（25次）。坪北辺から南に1/4の位置には坪内道路があり、北側溝に近接した位置には門と考えられる柱列がある。この位置は坪東辺から約1/3西に入ったところにあたる（22次）。東堀河東側では総柱建物がみつかった（5次）。西側では甕据付痕跡を伴う掘立柱建物を検出した（33次）。

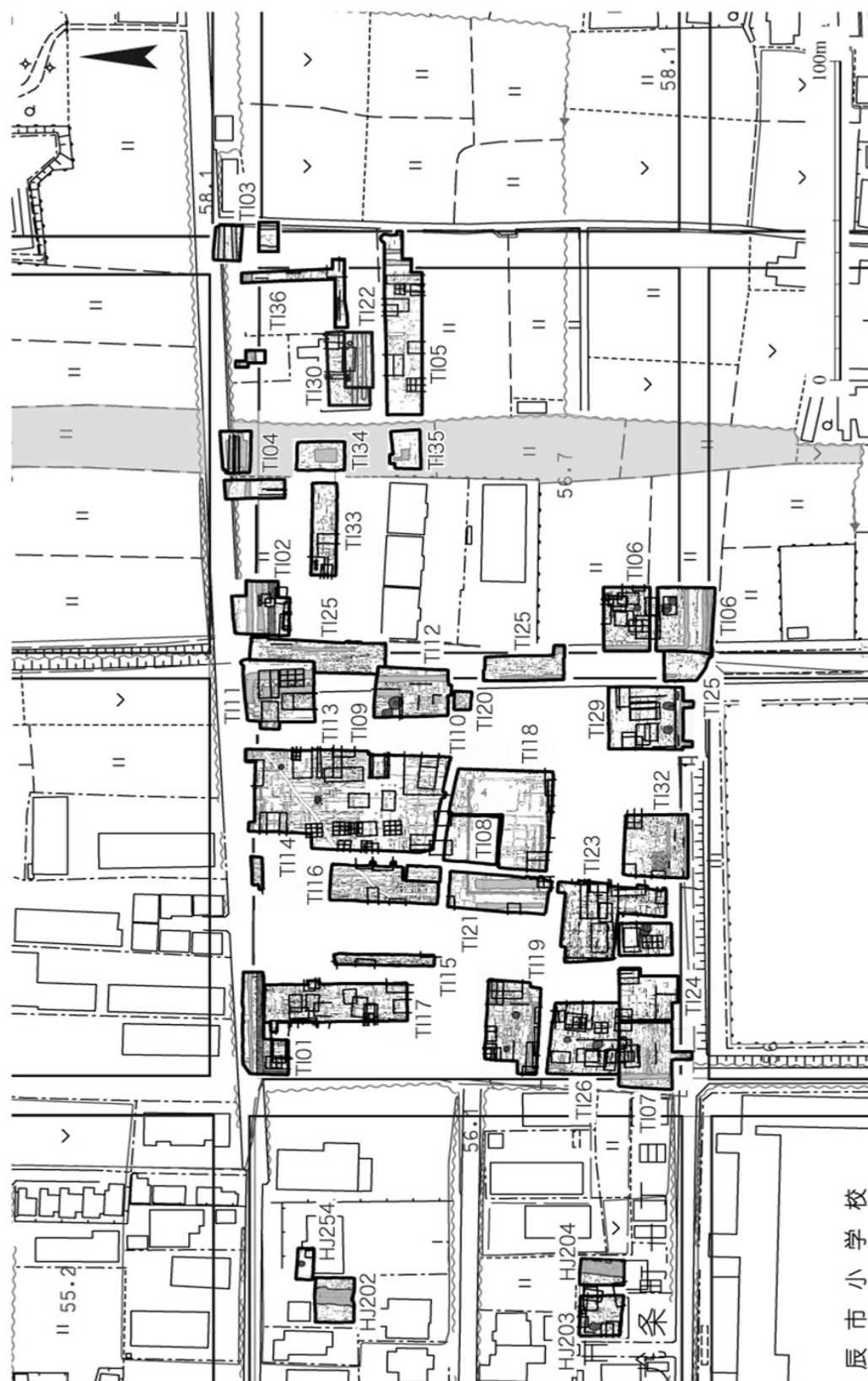


图9 左京八条三坊三坪・六坪・十一坪遺構図(1/2,000)

甕据付痕跡を伴う建物は東市跡推定地では初めての検出例である。

十一坪の北東側で行った発掘調査（５・22・30次）では、南北棟の建物が多く検出されている。西には東堀河があり、北と東とには築地が想定されていることから、築地に直接門を開かない限り、敷地内への進入は坪内道路からのみとなる。30次調査で検出した東西方向の坪内道路の南北両側には、南北に細長い区画が東西に並んでいたと考えられる。

（3）出土遺物

これまでの調査で様々な遺物が出土している。十一坪では施釉された平瓦（三彩瓦）が出土した（６次）。36次調査では北廂付東西棟掘立柱建物の北西隅の柱穴から、和同開珎が51枚連なった「さし銭」がみついている。この調査では「伊予口含濃郡」（表）「月廿九日進上口」（裏）と書かれた木簡も出土した。「含濃郡」は神野郡（のち新居郡。現愛媛県西条市、新居浜市）のことと推定される。30次調査では坪の東側を区画する坪内道路の北側溝から、ガラス埴塼片が３点出土している。六坪での19次調査では陶枕片が出土している。

出土している軒瓦の数量は50点に満たない。それらの中には左京八条三坊十五坪で検出された、白鳳期にさかのぼるとみられる「姫寺」所用の瓦や平城宮式の瓦がある。平安京では東市の近くに市姫金光寺があり（「中昔京師地図」（宝暦3（1753）年）、『金光寺縁起』によるとそれは市の守護神として祀られたものであるらしい。平城京でも市に隣接する寺院の境内地に市の守護神が祀られた可能性があり⁽¹³⁾、東市との関連をうかがわせるが、現状では出土した瓦からこの地の性格に関わる特徴を述べるまでには至っていない。

興味深いこととして、「鯛」と書かれた墨書土器が六坪で行った12次調査の井戸SE200から2点、十二坪で行った27次調査の井戸SE502から2点出土していることがあげられる。また、SE200からは「小」のような文字もしくは記号を記した土器が19点、SE502からは「𠄎」と書かれた土器が12点出土している。２つの井戸から出土した遺物は時期も同じ奈良時代末頃のもので、同じような行為が行われているという点から、六坪と十二坪とに関連があった可能性が考えられる。SE502からは刀子や銭貨（和同開珎1・神功開寶2）の他、横串、斎串、横斧、挽物皿、竪杵なども出土している。

（4）東市の造営

左京八条三坊という宮からは離れた地で、４つの坪がそれぞれ築地で囲まれた区画はどのような性格をもった場所であったのだろうか。六坪と十二坪とが出土遺物からみて、何らかの関連をもっていた可能性があることも上でみたとおりである。

近接する左京八条三坊九・十坪、九条三坊十坪は坪内が１条の溝や柵列等により、1/8、1/16、1/32といった小規模に分割された宅地で、各宅地には掘立柱建物数棟と井戸が配されていたことが明らかとなっている⁽¹⁴⁾。東市跡推定地のうち、比較的多くの調査が行われている左京八条三坊六坪や十一坪は、各時期の建物配置や遺構変遷は今後の検討課題ではあるものの、坪周囲の閉塞施設にしても坪内の区画施設にしても、上のような小規模に

分割された宅地とは様相が異なっているように思われる。

4つの坪がそれぞれ独立し、各辺に門が開いていたこと、広場とみられる空間があること、堀河が存在することはいくつかの史料にみえる市の景観とも符合する。出土した遺物の時期からみて、奈良時代後半、この場所が東市であった蓋然性は高いと考えられるが、東堀河と同様に、出土した遺物には奈良時代前半や中頃に遡るものはあまりみられない。店が立ち並ぶ空間や公的な施設、広場といった場所で塵芥を処理したとは考え難いように思われるが、この地がいつ頃から利用され始めたのかの解明を含め、これらの坪の性格については今後の調査によるところが大きい。

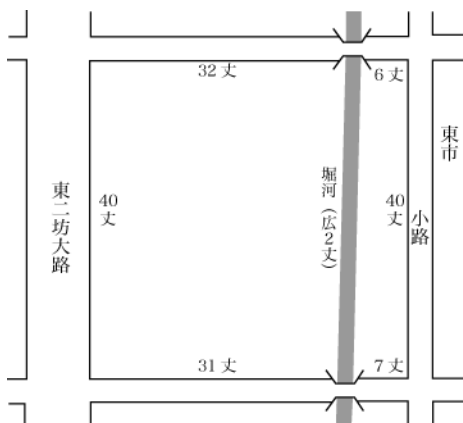


図 10 東市西辺の坪

注(20)文献を再トレース

3. 諸国の調邸

(1) 相模国の調邸

東大寺薬師院文書には相模国が平城京内に所有していた調邸が一町の面積を有して左京八条三坊にあり、それが「東市西辺」にあったとある。東市が左京八条三坊にあったことを物語る史料である。この史料には、その地に「広二丈」の堀河が北東から南西に若干方位を振って流れていたことも記されている（図10）。

東市跡推定地の西に隣接する左京八条三坊三坪では発掘調査が行われている⁽¹⁵⁾。2箇所が発掘区で（HJ202・204次調査）幅約3m、深さ1.5mの一連の溝を検出したが、16世紀の遺物が出土しており、時期が異なる。流れの方向も北西－南東方向と史料とは逆となっており、これらの調査では相模国調邸にかかわる成果は得られていない。

(2) 播磨産の瓦

2001年・2008年の左京五条四坊九・十坪の調査で、播磨産の軒丸瓦1点、軒平瓦1点、播磨産とみられる平瓦55点、熨斗瓦19点が、2011年の同八坪の調査では播磨産の軒丸瓦3点、軒平瓦1点、鬼瓦2点、播磨産とみられる平瓦が出土した⁽¹⁶⁾。これらの瓦は「播磨国府系瓦」とよばれる瓦の一種で、播磨国司の管理下において生産と配布がなされたものと考えられている⁽¹⁷⁾。発掘調査は各坪の縁辺部で行われたのみで、坪内の遺構の詳細は明らかではないが、播磨産とみられる平瓦、熨斗瓦は五条条間北小路北側溝から出土し、五条条間北小路南側溝や十坪からは出土していない。2001年の調査で出土した播磨産とみられる平瓦、熨斗瓦の出土分布から、これらの瓦は左京五条四坊九坪の南面築地塀に葺かれた可能性が指摘されており、軒瓦、鬼瓦が出土した八坪をあわせた左京五条四坊八・九坪の2坪に播磨国調邸が存在したと考えられている⁽¹⁸⁾。

(3) 市と調邸

調邸とは、諸国から運ばれてきた調庸物を納入する前に一時的に収納しておく施設で、それらを運ぶ運脚夫達や貢調国郡司が宿泊する施設も有していた。加えて、交易活動を行っていた可能性も考えられている⁽¹⁹⁾。諸国の調邸的施設が平城京内外に存在し、律令中央政府が各国に割り振った貢納すべき物品を自国で調達できない国は、東西市を利用することによりそれらの物品を揃えることができたとされる⁽²⁰⁾。このような施設は史料にみえる相模国に限らず他の国も必要としたであろうし、その機能からみても市に近い場所が望ましかつたに違いない。調邸は調庸により京の運営に必要な物資を調達した中央政府にとっても、重要な役割を担う施設であったともいえよう。その一方で、左京五条四坊八・九坪での調査は、必ずしも市に近いとはいえない地にも調邸が存在し、その造営には当事国自らが資材を用意した様子を明らかにした。今後、中心部のみならず周辺の環境をも含めた様相の解明が進めば、そのような場所に調邸が存在した理由も明らかになってくると思われる。

注

- (1) 田村吉永「平城京の西堀河と西市」『大和志』第10巻第9号（大和國史會 1943年）、高柳光寿「東大寺薬師院文書の研究—平城京相模国調邸・東西市庄・東西堀川のここと—」（上）・（下）（『日本歴史』101・102 1956年）。
- (2) 『大日本古文書』第4巻「相模国司牒」p. 58・59、「相模国牒」p. 83、「東西市庄解」p. 109、「相模国朝集使解」p. 114・115。なお、福井俊彦編『早稲田大学蔵資料影印叢書国書編』第14巻（早稲田大学出版 1985年）にその写真が収められている。
- (3) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』（奈良県 1976年）。
- (4) 奈良市教育委員会「21 平城京左京四条三坊十坪の調査 HJ第314次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』（1995年）。
- (5) 奈良市教育委員会「10. 平城京跡（左京三条三坊十一坪）の調査 第499次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成15年度』（2006年）。
- (6) 奈良県立橿原考古学研究所 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第101冊『平城京左京四条四坊・四条五坊—附左京四条三坊九坪（東堀河）』（2007年）。
- (7) 奈良市教育委員会「6. 平城京跡（左京六条三坊十六坪）の調査 第662次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成24（2012）年度』（2015年）。
- (8) 奈良市教育委員会「8. 平城京左京五条五坊五坪の調査 第195次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』（1991年）。
- (9) 堀井甚一郎・伊達宗泰「平城京域内河川の歴史的変遷に関する研究」『平城京の復原保存計画に関する調査研究』（奈良市 1972年）。

- (10) 奈良市教育委員会「2. 平城京跡（左京四条五坊）・三条遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成13年度』（2004年）。
- (11) 重見泰「第5章 総括」『平城京左京二・三・五条五坊—JR奈良駅連続立体交差・街路整備事業に係る発掘調査報告書（V）—』（奈良県文化財調査報告書第160集 奈良県立橿原考古学研究所 2013年）。
- (12) 東市跡推定地の調査については以下の報告を参照されたい。1～19・21次：『平城京東市跡推定地の調査』Ⅰ～ⅩⅥ、20次：奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9（1997）年度』（以下、同報告書は市概報と略し、年度を付す）、22・23次：市概報H10、24・25次：市概報H11、26次：市概報H12、27～29次：市概報H13、30～32次：市概報H14、33・34次：『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成18（2006）年度』（以下、同年報は市年報と略し、年度を付す）、35次：市年報H19、36次：市年報H24。
- (13) 田辺征夫「平城京東西市と大和川水運」『歴史学と考古学』（高井悌三郎先生喜寿記念論集 高井悌三郎先生喜寿記念事業会 1988年）。
- (14) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』（1986年）及び注(3) 文献。
- (15) 奈良市教育委員会「12. 平城京左京八条三坊三坪の調査 第202・203・204次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』（1991年）、同「10 平城京左京八条三坊三坪の調査 第254次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』（1993年）。
- (16) 奈良市教育委員会「(3) 平城京跡（左京五条四坊七・九・十坪）の調査 第459-1・-2・-3・-4次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成13年度』（2004年）、同「平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成21（2009）年度』（2012年）、奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「平城京跡（左京五条四坊八坪） HJ649次」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会年報—平成23年度—』（2012年）。
- (17) 今里幾次「播磨国分寺式瓦の研究—加古川市野口町古大内出土の古瓦」『播磨郷土文化協会研究報告第四冊』（1980年）、同「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡（本文）』（姫路市教育委員会 1984年）、同「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布勢駅家—小犬丸遺跡 1990・1991年度発掘調査報告—』（龍野市教育委員会 1992年）。
- (18) 原田憲二郎「平城京内における播磨産瓦出土の背景について」『帝塚山大学考古学研究所研究報告ⅩⅤ』（帝塚山大学考古学研究所 2013年）。
- (19) 舘野和己「相模国調邸と東大寺領東市庄」注(13) 前掲書。
- (20) 栄原永遠男「都城の経済機構」岸俊男編『都城の生態』（日本の古代第9巻 中央公論社 1987年）。